



Rotary International 2020-21 会長 ホルガー・クナーク (ドイツ)	国際ロータリー第2670地区 ガバナー 篠原 徹 (高松東RC)
テーマ ROTARY OPENS OPPORTUNITIES 『ロータリーは機会の扉を開く』	丸亀東ロータリークラブ 会長 氏家 正俊 幹事 森 英司

2020年8月4日(火)

2020~2021年度 第46年度 第5回 通算第2174回例会

【会長報告】 氏家 正俊 会長

◆ なし

【幹事報告】 森 英司 幹事

- ◆ 岡山後楽園RCとの親睦ゴルフコンペの案内文を配布しておりますので、8月18日(火)までに出欠返答をお願いします。
- ◆ ロータリーの友・ガバナー月信8月号を配布しております。
- ◆ 次週(8月11日火曜日)の例会はお盆休みのため「休会」です。
- ◆ ガバナー事務所・ガバナーエレクト事務所・丸亀東RC事務局は8月11日(火)~14日(金)迄をお盆休暇とさせていただきます。
- ◆ 本日例会終了後、8月理事会を行ないますので、役員・理事の方はご出席をお願いします。

【プログラム】 ♡ 会員卓話 (久山 峰年 会員)



1920 (大正9) 年、島根県那賀郡岡見村 (現浜田市三隅町岡見) で生まれた石本正氏。95歳で逝去する前は石正美術館名誉館長をつとめる傍ら、自らによる絵画教室で絵を描く心とよろこびを伝え続けました。



日本画家・石本正が生涯の画業において大切にしましたもの。それは技術でも地位でもなく、絵を楽しむ心でした。

描きたいものを、心の向くままに。日本画家でありながら、日本画の「しきたり」を嫌い時には油彩やパステルなども使い、とことん純粋に絵を楽しんでいた石本氏。上辺の技術を超えた、描きたいという“心”が、彼の絵筆を運ばせていたのです。そうして遺された作品の数々は、今も見る人の心を揺さぶり、石本氏のかげがえのない生き証として保存・展示されています。

“絵描きには名前なんて要らないです。”

“本当に大切なのは、絶えず感動する気持ちを持ち続けて絵を描くことなんです。僕は、石本正という親から貰った名前をもっているけど、こんなものは今日限り捨ててもいい。僕にとって、名前なんてどうでもいいんです。絵を見る時は、作者の名前で判断しないで作品そのものを見て欲しい。” (石本正著「石本正 青春時代を語る」より抜粋)

生前、このように語っていた石本正氏。彼の貫いた信念は、先入観にとらわれがちな私達の感覚に深く突き刺さります。

~四つのテスト~

言行はこれに照らしてから

1. 真実かどうか

3. みんなに公平か

2. 好意と友情を深めるか

4. みんなのためになるかどうか

「石本と女性美」

石本正氏にとって《女性》は聖なるもの、美しいものの象徴でした。

次のようなエピソードがあります。

終戦直後のある日。石本氏は電車の中で、目の前に座った若い母親が子どもに乳をふくませている様子を目にしました。このとき、豊かな乳房の間に蒼白い一本の線を感じて息をのんだといいます。

理屈から考えれば、影になるはずのこの箇所が、蒼白く光を放っているように見えたのでした。この発見の衝撃は彼の身体の中を貫き、その後、女体だけが発する神秘的な燐光として、裸婦の胸の間を白く描くようになりました。

石本氏は女性の透き通る肌に究極の美を見出し、その下の血液の流れにいたるまでリアルに、かつかげろうのようなほのかな雰囲気をもって表現しようとしていました。

それは今までの日本画にはなかった新しい試みであり、石本氏の画業における永遠のテーマとなったのです。

“私はトコトンまで美しいものに賭けたい。”

裸婦という、一見するとデリケートな画題。

しかし石本氏はそれを限りなく自然に、純粹な情熱をかけて挑んでいます。若い頃から、欠かすことなく描き続けたデッサン——それらは膨大な数にのぼり、没後遺されたアトリエからも、大量のデッサンが発見されました。

描いても描いても尽きる事のない、女性の美しさに対する彼の感動の心をうかがい知ることができます。コンテを使って輪郭を太く描いた印象的な初期の作品から、鉛筆の繊細な線と濃淡でやわらかな肌を表現した、色香ただよう壮年期のものまで、石本氏が生涯をかけて追い求め描き出した女性たち。

作風の変遷を経てなお、その肌のぬくもりや息遣いをも感じさせるような独特のリアリティにあふれています。

石本氏は、花を描いた作品も多く遺しています。その中でも牡丹や椿について「花が女性に見える」と語っていた石本氏。彼の描く花は、必ずしも見たままの姿ではなく、目の前の花を通してその中にある女性の美しさや命の輝きを描こうとしました。

その石本氏が花の季節になると足繁くスケッチに通った「無二荘牡丹園」（京都市）の牡丹は、現在石正美術館の「華晴苑」に一部の株が移植されています。この中には当時石本氏が実際スケッチした株も含まれ、往年の画家を偲ぶように毎年大輪の花を咲かせています。



「私の舞妓」

1940年、石本氏は京都市立絵画専門学校日本画予科に入学します。

それからはアトリエを京都に構え、当石正美術館ができるまで故郷に帰ることは殆どありませんでした。そして石本芸術を語る上で、欠かすことのできない画題のひとつとなったのが「舞妓」です。

「舞妓」と聞くと、純日本的なイメージと共にその姿を思い浮かべる人も多いでしょう。



～四つのテスト～

言行はこれに照らしてから

1. 真実かどうか

3. みんなに公平か

2. 好意と友情を深めるか

4. みんなのためになるかどうか

美しい着物やかんざし、白粉で化粧した真白い顔などの浮世離れた装飾美に、生きた人形という印象さえ抱いてしまうかもしれません。

しかし彼が初期に描いた舞妓は、華やかなイメージとは対物的でした。舞妓に観音像の姿を重ねたというそれは、彼女たちの心情、とくに寂しさやあどけなさを匂わせる物憂げな表情に満ちています。

石本氏と親交のあった川端康成は、「石本観音」と呼び親しんだといいます。

1959（昭和34）年。このとき発表された「横臥舞妓」は、当時大きな話題となりました。簡略化された素朴な顔立ちの舞妓は、まるで土から生まれ出でたかのような太くて荒い輪郭線で縁取られ、しかももろ肌を見せていたのです。

……“ぼくの描こうとしている舞妓は、いま目の前にいる彼女ではない。実在している彼女を通して、ぼくは自分のイメージの中でのみ生きている舞妓を描く。描くというよりも必死でその姿なき像を追求する。（中略）美しくはなやかな外相の奥にある舞妓のいのちといったものを、ぼくは描き出そうとする。”……

（1968（昭和43）年1月5日 毎日新聞）

かつての遊女と違い、芸事で身を立てる芸妓や舞妓はけっして客の前で肌は見せません。これまで画題として親しまれてきた、人形のように美しく着飾った舞妓像とは一線を画す斬新な表現。当然ながら、賛否両論を巻き起こす事態となりました。

しかし石本氏は、世間の評価に気を留めることなく、自己の感動と信念を大切にしている。その後も発表し続けました。

華やかさの内に哀愁を漂わせた舞妓作品は、多くの人々の心を捉えることとなりました。

「全ての賞を辞退」

1971年、“在来日本画の常識を破る人体のリアリティーの追求により、日本画における裸婦の表現に一エポックを画した”として第21回芸術選奨文部大臣賞、更に第3回日本芸術大賞を受賞しました。しかし石本氏はそれ以降全ての賞を辞退しています。

“名声はどうでもいい。感動を受け、絵を描くことが僕の人生だから。

それ以外のことは何にも考えない。”

「憧れのロマネスク」

石本氏は、若い頃から中世ヨーロッパの美術に関心を寄せていました。中でも石本氏の心をとらえてやまなかったのが、ロマネスク美術でした。

太い線に簡略化された形。ルネサンス以降の写実的で華やかな絵画とは異なる、素朴かつ生命感溢れる表現に強い憧れを抱いた若き石本氏は、ロマネスクの画集に取材した一連の作品を発表します。それは当時新制作協会展において大変高い評価を受け、3年連続で新作家賞を受賞しました。

しかしその一方で、次第にこれらの作品に対し「画集に寄りかかりすぎていた」と考えるようになり、その後は同じ画風で描くことを止め、これらの作品はこの美術館ができるまで倉庫にしまわれることになりました。

表現が直接反映されることはなくなりましたが、その後の画業においても中世ヨーロッパ美術がもたらす感動は彼に多大な影響を与え続けることとなります。



～四つのテスト～

1. 真実かどうか

2. 好意と友情を深めるか

言行はこれに照らしてから

3. みんなに公平か

4. みんなのためになるかどうか

「ヨーロッパ美術の旅」

石本氏が憧れの地・ヨーロッパに初めて訪れたのは1964（昭和39）年、44歳の時でした。イタリアの主要都市を訪れ、そこで本物の中世の※フレスコ画に出会います。細部を簡略化した素朴な表現で生き生きと描かれたこれらの絵画は、当時の画家たちの強い意志が感じられるものでした。さらに石本氏にとって、この文化にじかに触れることはこれからの日本美術を考えるうえで非常に大切なことのように思えたのでした。そして5年後の1969年から、当時講師を務めていた京都市立芸術大学の教え子ら数十人とともにヨーロッパ各地をめぐる美術の旅に出るようになります。この旅は、1990年までの20年間で9回も行われました。

一行は現地でバスを貸切り、移動の先々でスケッチをしながら、最長81日間、約6,050kmにおよぶ行程を旅したのです。

※フレスコ画…壁に塗った漆喰が生乾きのうちに水性の絵具で描き、絵具がしみこみながら漆喰と共に固まるのを応用した技法。光沢のないざらっとした表面で、絵具の発色が日本画と似ている。

さて、教え子と一緒にとはいえ、現地で技術的な指導などは一切しなかった石本氏。気に入った場所を見つけると、誰よりも先に駆け寄り夢中で描き始めたといいます。はじめは困惑していた教え子たちも、心から楽しそうに描いている彼の姿に刺激され、ひたすら写生に打ち込みました。

「現場で描き、ホテルで直し、百十枚程描いたろうか。ついには持っていった紙が足りなくなって、イタリアの画材屋に仕入れにいったくらいだ。とにかく集中して描けるのは絵を描くのが本当に面白いからだ。面白くて面白くて仕方ない」

（石本正「我がイタリア」新潮社より）

現地で描かれたスケッチの一枚一枚からは、憧れだった本物の文化に触れられた感動と、溢れんばかりの“絵を描くよろこび”が伝わってくるようです。

こうして20年の間で、全9回の「ヨーロッパ美術の旅」で石本一行が廻った国の数は、イタリア、フランス、スペインなど、10か国以上にのぼりました。

中でも石本氏はイタリアを気に入り、計7回も訪れています。大きな街から通常の観光では訪れないような小さな村まで、国内隅々まで足を運び、イタリアの美術文化を堪能したのでした。

「塔の天井画制作」

2001年4月、故郷である島根県浜田市三隅町に石本正氏の作品を収蔵展示する石正美術館ができました。

自身が愛した中世イタリアの教会をモデルに回廊や塔を配し設計された美術館の完成を石本氏は大変喜びました。

そしてある時、美術館入り口にある高さ14mの塔の最上

階に、地域住民と協力した《天井画》を制作することを提案します。



故郷に「本物の文化」を

ヨーロッパの旅で田舎の村を巡り、地元住民によって大切に守り継がれているロマネスク美術を目にしていた石本氏。

かつてのヨーロッパでは、石造りの建物を建造する際、時には領主も一緒になって石を引っ張り、石積みをしたといいます。そうして地域の皆で力を合わせて作られた建物が、今も変わらず日常生活の中に溶け込み大切にされている…、石本氏はそれを「本物の文化」ととらえ、石正美術館においても天井画を新たな文化として残したいと考えたのでした。

～四つのテスト～

1. 真実かどうか

2. 好意と友情を深めるか

言行はこれに照らしてから

3. みんなに公平か

4. みんなのためになるかどうか

857名による天井画制作

2008年春、本格的に天井画の制作が始まります。

描くモチーフは「夏の藤棚」。青く茂った葉の間から金色の木漏れ日が覗くという石本氏が地元の大麻山神社で見た藤棚からの構想でした。

下絵の段階から約50人の地域住民が参加し実物の1/4の天井の型に金箔が貼られました。その箔の上から、石本氏が日本画の絵の具やパステル、木炭、鉛筆を使って下から見上げた藤棚の絵を一気に描き上げました。

“絵を描くのは遊びなんや。頑張らんでやってほしい”

“自分の描いた下絵はあるが、それに囚われることなく、参加する一人一人が自分の心で藤を描いて欲しい。楽しく描くことが一番なのでそのことを心がけてもらいたい。画面のどこかに昆虫がいても面白いと思う。自分の気持で自由に描くのがいい。絵を描くのは遊びなんや。頑張らんでやって欲しい。”

(石本正「石見美術第8号」2011年より)

自由に楽しく、人々が協力して絵を描き受け継いでいくまさに文化を一から作り上げるという、石本氏にとっても画業の集大成となる一大プロジェクトとなりました。

同年8月25日この日から地域住民をはじめ石本氏の教え子の画家や当時客員教授をしていた京都造形芸術大学の大学院生も加わり、全4期に渡る天井画制作がスタートします。塔の最上階に足場を組み、参加者たちは思い思いに葉を描き、空の色となる金箔を貼り全身絵の具まみれになりながらも皆笑顔で「描くよろこび」を分かち合いました。地元の大人はもちろん部活の合間にやってきた中学生や石本氏の絵画教室に参加した小学生遠路はるばる描きにやってきた人さらには報道関係者まで一緒になって作業しました。

一人の絵筆が加わるにつれ、刻々と変化していく天井画。こうして制作期間2年述べ857名にのぼる参加者の手で、夢の天井画は誕生したのでした。

天井画の完成

天井画の大部分が完成し、いよいよ自らが最後の絵筆を入れるため、石本氏は京都のアトリエから再び故郷へ帰ってきました。制作現場にはその最後の絵筆が入る瞬間を見守ろうと、学芸員や報道関係者など多くの人が集まり、石本氏の到着を待っていました。しかし現場で絵を見た石本氏は、「これでいい。自分は手を入れる必要はない」と言い、筆を入れることはしませんでした。

「本当にいいよ。本当にやってよかったな。おおきに」

嬉しそうに天井画を見上げる石本氏。自分の筆が入ることで、制作に関わった一人一人の存在が薄れてしまうことを嫌った、彼らしい完成の瞬間でした。

金箔の貼られた天井画はまさに、藤の葉の間から覗く空のように、季節や天候、時刻、見る位置により様々な変化を見せます。また、自由な心で描かれたカマキリや蝶など、今でも思わぬ発見をすることができます。

石本氏が願った、故郷の新しい「本物の文化」。現在も石正美術館で大切に保存され、受け継がれています。

「石本美術館HPより抜粋」



~四つのテスト~

言行はこれに照らしてから

1. 真実かどうか

3. みんなに公平か

2. 好意と友情を深めるか

4. みんなのためになるかどうか

【本日のニコニコ】

- 本日、会員卓話をさせてもらって
- 久山さんの会員卓話を拝聴して
- 久山さんの会員卓話を拝聴して
- 久山さんの会員卓話を拝聴して
- 久山さんの会員卓話を拝聴して
- 歓迎会をして下さって
- 誕生日を祝っていただいて
- 四国新聞に長女の馬術大会

の記事が掲載されて

【来訪ロータリアン】 (なし)

【メイクアップ】 (なし)

【出席報告】 第2174回例会

< 8月4日(火)現在 >

会員総数	出席免除会員数	出席計算会員数	出席会員数	欠席会員数	出席率
40名	3名	37名	32名	5名	86.49%

第2172回例会

< 7月21日(火)例会分 >

会員総数	出席免除会員数	出席計算会員数	出席会員数	欠席会員数	出席率
40名	3名	37名	32名	5名	86.49%

【8月18日(火)の例会】

客 話 (出席委員会) 小宮山滋委員長
〔株)多度津自動車学校 校長 川崎 隆 様〕

【8月25日(火)の例会】

会 計 報 告 (神原太一 会計)

ロータリーの目的

ロータリーの目的は、意義ある事業の基礎として奉仕の理念を奨励し、これを育むことにある。
具体的には、次の各項を奨励することにある。

- 第1. 知り合いを広めることによって奉仕の機会とすること。
- 第2. 職業上の高い倫理基準を保ち、役立つ仕事はすべて価値あるものと認識し、社会に奉仕する機会としてロータリアン各自の職業を高潔なものにすること。
- 第3. ロータリアン一人一人が個人としてまた事業および社会生活において、日々、奉仕の理念を実践すること。
- 第4. 奉仕の理念で結ばれた職業人が世界的ネットワークを通じて国際理解、親善、平和を推進すること。

MARUGAME EAST ROTARY CLUB

例会場 オークラホテル丸亀 ☎23-2222
〒763-0011 丸亀市富士見町3-3-50

事務所 オークラホテル丸亀430号室

TEL ; 0877-21-6611 FAX ; 0877-21-6655

URL ; <http://www.marugame-east-rc.com>

例会日 毎週火曜日 PM12:30~PM1:30

E-Mail ; merc@soleil.ocn.ne.jp



【馬術の讃岐GP】

馬場馬術ジュニアライダー
で2位に入ったそうです。